

境界線なき世界へ〜その内と外を行き来して

宇野由里子

福岡県立修猷館高等学校 二年

「心の輪を広げる」

私はこの表現の意味を考えた。「輪」と表現する以上、そこには「境界線」が存在するのだろう。私たちは無意識のうちに「普通の人」と「障がい者」の間に線を引いてはいないだろうか。つい口にしてしまう「普通」という言葉。そもそも「普通」という画一的な線引きなどできないはずだ。しかし、私自身がいつの間にかこの境界線を行き来することに苦しんでいたと気づくことになる。

「おーうい、ゆうーりいたん！」

誰かに声をかけられた。どこか懐かしくて、しかしだどたどしい。顔を上げると、その笑みは私の視野いっぱいに

至近距離で広がった。彼女の名前はめぐちゃん(仮名)。小学校の頃と変わらず私に元気に手を振ってくれた。びっくりして目を見開く私において、彼女は小柄なお母さんに手を引かれ通り過ぎていった。診察室に向かう後ろ姿は、以

前と変わらず痩せている。久々の再会だというのに笑顔を返す間もなかつた。あつという間の出来事だつた。

高二になつた私だが、「こども病院」で年に一度の検診の日に、まさかめぐちゃんに会えるとは思いもしなかつた。

同じ小学校の同級生だつためぐちゃんには知的障害がある。クラスから日替わりで三人ずつ特別支援学級に足を運ぶ「昼食交流」の場で、初めて彼女に出会つた。その後運動会や合唱コンクールでは、私がめぐちゃんの介助担当になつた。その後も偶然掃除場が同じになることが多く、彼女は私の名前を他の友達よりも早くに覚えてくれたようだつた。

私が友達関係で落ち込むようなときも、テストであまり良くない点数を取つたときも、めぐちゃんはいつも変わらない満面の笑顔で、しかし何度か聞き直さないと聞こえないようなやさしい声で、私に話しかけてくれた。

「やつほおー、ゆうーりいたん！」

「めぐちゃん！ やつほー！ げんき？」

短い会話だが、心を開いて包み込んでくれるようで、とても嬉しかつた。

そんな低学年のころ、実は私は紫斑病という病を患い、福岡こども病院に入退院を繰り返していた。突然の腹痛と同時に下肢に現れる紫斑。診断が下れば即入院で、まずは数日の絶食から始まる治療。まだ幼くか細い腕に、ミシン針のように太い点滴針を刺し、ぐるぐる巻きにテープを巻きつけられた。ベッドから動けず、一週間後にやつと車いすの時もあつた。目の前に伸びる病棟の廊下が、どこまでも長く続いているように見えた。

とはいえる、私の入院期間は一ヶ月程度で短い方だつた。周囲には、まさに難病と闘う子どもたちがいた。たくさんの中でも機械に繋がれた子、補助車を使ってゆっくりと歩く子、ベッドから一步も出られない子…。出身地が遠い人も多かつた。長期入院の子とも知り合いになり、励まし合つたものだ。

翻つて、現在の私はどうだろうか。水泳を続け、病気を克服し、スポーツでも活躍できる体を手に入れたはいいが、当時の切実な思いを忘れてはいなかろうか。置かれた状況に感謝しきれず、家族には文句ばかりで、弟には厳しく指摘する毎日。担当医の先生がいまだに勧める年に一度の定期検診も、またどうせ正常値の範囲に収まるだろうという希望的観測で臨んでいる。あのころの私はどこへ行つたのか…。辛い思い出に包まれた病院でめぐちゃんに再会した瞬間、私はあの原点にタイムスリップしていた。それも、時間軸だけではなく、空間軸も移動したような感覚。そう、幼い私が感じていた「壁」は、健常者との境界線だつたのだ。確かにあの頃の私は、自らの手で線を引いた「輪」の外側にいた。「輪」の内側にいる元気な友達たちが眩しかつた。しかし、健康な体を手に入れた今、私は無神経にその境界線をまたいで「輪」の中に入り込み、鈍感にあぐらをかい日常を送つてているのではないか。自分を中心に考

間の私を切り取つて、自分を責め、その対応を悔いた。自分で引いた線がいつしか「障害」物になつてはいまいか。いつの日かこの世の中にあるすべての境界線が限りなく広がり、その内側と外側を区別する「輪」という概念 자체がなくなればいいと思う。その実現のために、私は障がい者など社会的な弱者こそ輪の中心において考えたいと思う。障がいもまた人それぞれがもつ個性であり、多様性として認め合うことが大切だ。皆かけがえのない命を燃やして生きている。今置かれた状況に感謝をし、困っている人が目の前に現れた時に躊躇なく手をさしのべる勇気を持ちたい。それがひいては

“No one left behind”

すべての人が認め合つて、一人残らず幸せを感じられる世界を作り上げられるのだと信じている。

今回の検査も無事正常値に収まつた。もう帰つていいいのに、私は夕陽に赤く染まる廊下の椅子に、まだ座つていた。ふと、向こうからめぐらんらしき人影が現れた。その瞬間、私は立ち上がつた。そして笑顔で駆け出した。

し 知る。そしてつながる

須藤希望
すずとうのぞみ
鈴鹿高等学校二年

私の母は、障がい福祉事業所の職員として働いています。そういう背景があり、私も小学生の頃から、母の職場の就労継続支援事業所に何度もお手伝いに行かせてもらいましたことがあります。

そこでは、併設されている農産物直売所や地元の道の駅などでの対面販売用の野菜や果物の袋詰めを行っていました。私も利用者さんの中に混じって、一緒に作業をさせていただきました。

とても恥ずかしいことだつたのですが、それまでは障がいを持つた方は「手伝つてもらわなければ何かをするのは難しい人」というイメージを持つていました。

しかし、利用者さんは慣れた手つきで黙々と作業をされていました。途中で次の作業に取り掛かる際に、勝手に自分の方法でやつてしまつた方がいて、職員さんに「終わつたら報告してください。」と注意されました。その方は「最初にそんなこと言われてなかつた。」と言いながら、少

「お手伝いしようとした気持ちと声を掛けたことは確かに良い事だつたと思うけど、その時、その利用者さんは困つていそだつたかな？」と。

就労継続支援事業所という場所は、様々なハンデキヤップを持つた方が、少しでもできる事の幅を広げて仕事につなげていくための訓練の場所だそうです。そのための困りごとや障壁を取り除くことを『合理的配慮』と言い、その合理的配慮を行つて作業や訓練をし易くするためのお手伝いを『支援』と言うそうです。

先の話の利用者さんも、前もつて「報告してください」と伝えてあつたら、報告をしていました。そして、私が手伝おうと声をかけた利用者さんは、その方が持つて運びやすくする為の袋を使つていた事、それを用意したということなどが『合理的配慮』となる事を学びました。また、それぞれに困つている事やわからない事がある方が、自分から声を上げる練習をしてもらう事も、自立につながつていく支援だという事も学びました。

合理的配慮とその意味を学んで、私は最初に思つていた様な「手伝つてもらわなければ何かをするのは難しい」という考えが「配慮や手助けがあればたくさんの方が出来る」という事に変わつていきました。

ある利用者さんはとても気さくで優しい方で、緊張している私にたくさん話かけてくれました。日常生活を送つて

し怒つたような態度で荒っぽく作業をしていましたが、次の作業が終わると「できました。」とちゃんと報告をしていました。

また、別の利用者さんは、手と足にハンデキヤップがあり両杖をつかつている方でしたが、袋詰めした商品をその方専用の肩から掛ける袋に入れて、売り場に運んでいました。その時私は、あんなに重い荷物を運ぶ作業をなぜ体の不自由な方にさせるのか、手で持てそうな方が手伝つてあげないのか、と思い「手伝いましょうか？」と声を掛けました。するとその利用者さんは「そんなことを言つてくれて嬉しいなあ。でもこれは僕の仕事だしこの袋があるから大丈夫。」と言つて自分で運んでいきました。

自分では「良い事」をしようとしたつもりだつたのですが、なんだか受け入れてもらえなかつたような残念さがあり、後ほどこのやり取りを母に話しました。すると母からはこんな話がありました。

いる中で、確かに不便で不自由な事が多い事、そんな中でも、私のように声をかけてもらう事は本当に嬉しく、どうしても難しいことはやはり手助けをしてもらう事によつてやり易くなると話していました。

しかし反対に、困つていても明らかに避けられたり、見て見ぬふりをされる事は、それぞれの人の考え方があるのはわかつていながらも、無関心はやはり寂しくて残念な気持ちになるとも話していました。

私は、声をかけたことはお節介を焼いてしまつたのかもと少し自信を無くしかけていましたが、その方がたくさん話を聞かせてくれたお陰で、もしも、どこかで困つている方を見かけたら、ハンデキヤップがある方にも無さそうの方にも「お手伝いしましようか？」の一聲をいつでもかけられる心構えを持つて準備をしていようと思いました。

新型コロナ禍のせいで、いろいろな場面での距離をとる事が求められており、人と人との触れ合う機会もうんと少なくなりました。マスクや画面を通しての交流は一見味気なくも感じますが、それも今の時代に生きている自分たちの強みとして、情報を得る事、知識を持つ事、関心を持つ事など、離れていてもできる方法で、心がつながる場面を探していこうと思いました。

仲間のために、未来のために ～私のスーパーヒーロー～

盈進中学高等学校五年
はせがわ

長谷川てまり

「部屋に飾つておくね。」私たちが作つた似顔絵入りの誕生日プレゼントをすぐ喜んでくださつた。しあわせな時間だつた。

ずっと直接会えなかつた。新型コロナウイルス対策で、会うのはいつもパソコンの画面越し。だからずつと、少し悲しかつた。

七月上旬、感染状況が改善。「よし、行くぞ！」やつと直接対面がかなつた。笑顔がとてもチャーミングなおじいちゃん。私の大好きな人。その人は、岡山県にある国立(ハンセン病)療養所長島愛生園の自治会長を務めておられる中尾伸治さん(87)。冒頭は、その時のシーン。彼は、「飾らずにありのままに生きる」と、「ひとはどんなときでもやしさを大切に生きること」を教えてくれる、私にとつての「正義のヒーロー」なのだ。

中尾さんに初めてお会いしたのは今から半年以上前のこと。「らい予防法」(1996年廃止)に基づく終生絶対隔離政策

によつて、故郷を追われ、家族を奪われた中尾さんたち、ハンセン病回復者。二度と同じ過ちが繰り返されないよう、彼らの生きざまを記録し、後世に残していく取り組みを部活の仲間と企画し、オンラインで聞き取りを開始した。

中尾さんは、療養所に収容されてからも、過酷な労働を強いられ、子どもをつくることも許されなかつた。家族に差別が及ぶことを恐れ、家族と縁を切るという意味で偽名が強要されることもあつた。そんな生活の中での生きざまを、中尾さんから3回、時間にして約6時間も対話しながら、記録した。

「ここにちは！ 今日もよろしくね！」と、明るいいつもの中尾さん。そんな元気いっぱいな姿とは裏腹に、ゆっくりと、そして少し悲しそうな表情で自身の過去を語り始めた。

17歳の時、ふるさとの奈良に帰省し、兄に「名前を変えた方がいいかな」と聞きました。すると兄は、「兄弟2人しかいないのに、そんなさびしいことを言うなよ」と言つてくれたんです。うれしかつたですね。療養所では、偽名の人がたくさんいましたから。

でも数年後、再び帰省した時に、その兄がこんなことを言つた。「悪いけど今後は、家に帰つて来んといてくれ。」つて。そのときはもう、兄は結婚して子どもができるようになりました。兄にも守らなければならぬ家族ができたら、差別を恐れたんですね。僕は兄の言葉をすぐに受け入れました。

「誰も悪くないのに…」と思つた。それがいちばん悲しかつた。だから泣けた。同時に、怒りが全身を襲つた。それは中尾さんのお兄さんやそのご家族に対するものではない。彼らが恐れる「差別する社会」に対する怒りだ。大切な家族を守るために、大切な家族を失わなければならない状況に追いやつた社会に対して、どうしても怒りが収まらなかつた。

だが、もし私だつたら、と考え込んだ。いや、そうやつて、自分事として考えなければ、中尾さんとご家族に申し訳ないと思つた。だつて、私もその「社会」の一員なのだ。だから、二度と同じ惨劇を繰り返さないために、差別の事実を

知つた私が、差別をなくすための行動をしなければならないと思つた。

でも私は正直、自信がなかつた。回復者やご家族の心に深く刻み込まれた重い苦しみは到底、私には理解できない。それにハンセン病がどんな病気なのかさえ、つい最近まで知らなかつた。そんな自分が後世に回復者やご家族の思いを継承できるのだろうか…。

そんなふうに、自分を見つめて迷つてゐるときにふと、中尾さんを思い出した。彼はいま、長島愛生園の世界遺産登録に向けて精力的に活動している。そのようすを私に語つてくれたときの彼の生き生きとした表情を思い出したのだ。

長島愛生園にあつた患者専用の収容棧橋。ここは入所者が家族や社会との繋がりを引き裂かれる場所。同時に、彼らが「汚い者」として扱われる生活が始まる場所だ。だが、棧橋は今、潮の流れに耐え切れずに朽ちてゐる。中尾さんはこの現状に対してもう私に言つた。

「(棧橋を)残さないと、過酷な隔離政策の歴史も失われ、忘れられることになつてしまふんよね。忘れるとなれば、同じ過ちを繰り返すんよ。だから、自治会長としても何とか、残さなきやいけないと頑張つています。」

中尾さんは、未来に生きる人々の幸せのために棧橋を復旧しようと懸命に活動している。「未来に生きる人々」と

は、私のことだ。

それだけではない。中尾さんは県内外の小、中、高等学校で語り部活動もされている。療養所に暮らす回復者の平均年齢は中尾さんの年齢と同じ約87才。自治会活動も語り部活動もできる人が年々、少なくなつていく中で、中尾さんは、仲間のために自治会長を引き受け、仲間の思いも自ら背負い、語り部活動を務めているのだ。

中尾さんは、病気の後遺症で、顔や手が変形している箇所がある。その彼が語り部活動でこだわっていることを教えてくれた。

「子どもたちを前にしたとき、顔や手が見えるように工夫しています。病気そのものを知つてもらうことで、差別や偏見が少しでもなくなつていくと僕は信じているんですよ。」

どうすれば若い世代にも理解が広がるか。中尾さんは、差別する社会を、人にやさしい社会に変えるために、自分を飾らず、ありのままの自分で、自分を語り、行動している。

未来に向かつて真っ直ぐな眼差しで進む中尾さんの姿は誰よりも輝き、誰よりもかっこいい。そんな中尾さんを見て、自分に自信がなく、何に対しても全力で打ち込むことをためらう自分がちっぽけに見えた。そして、私も中尾さんのように強くなろうと決心した。

私は将来、保育士になりたい。子どもたちが人を大切にして、平和な世界をつくる人に育つてほしい。そのためにも、私は子どもたちに伝えたい。仲間のために、未来のために、恐れることなく、自ら立ち上がり、私に勇気を与えてくれた私にとつての正義のヒーロー中尾伸治さんが生きた証を。「ねえ、ねえ、私の大好きなヒーローを教えてあげようか。あのね……」つて。